
繋がる物語

緋眼の狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がる物語

【Nコード】

N77190

【作者名】

緋眼の狼

【あらすじ】

北郷流の長男として産まれた 北郷 一刀。

彼が三国へと向かう扉を開く時、新たな外史の幕が上がる！

其の一 プロローグ（前書き）

本作は真・恋姫無双の二次作です。

時代がおかしかったり、
強さが違ったりしていますが、それでも良い方はお進み下さい♪

其の一 プロローグ

ブンッ、ブンッ、カキンッ

俺の連撃が弾かれる。

シュッ

相手のカウンターが俺を喰らわんと襲い掛かる。

ここは弾きたくなるが我慢して受け流す。

ヒュッ、ブンッ

さらなる連撃が襲い掛かる。

だがその連撃は空を斬る。

そして生まれた一瞬の隙。

「はっ!!」

俺は神速の突きを繰り出す。

「ぐっ…」

ガキンッ!

相手は刀の腹で突きを防ぐ。

しかし、突きの衝撃を受け流す事が出来ず、その手から刀が落ちる。

ヒュン

俺の刀の切っ先が相手の首の寸前で止まる。

試合が終わる。

「ふう、最後のは危なかった。」

「何を言ってる、手加減無しに突きを放ちやがって。」

「親父こそ化け物かよ！ 普通突きを刀の腹で受けれるのかよ。」

親父「当たり前だ。俺は北郷流の当主だぞ。 まあそれも今日までだがな…」

「そう落ち込むなよ。これからは俺が当主として親父の代わりに頑張るからよ♪」

親父「まあ負けたからには仕方がない。 後で部屋に來い。試験に受かったお前に当主の証を授ける。」

ガタン

そう言って親父は道場から出て行った。

俺、北郷 一刀は、はるか昔 中国の三国時代から続いている（と、言われている）剣術の名門 北郷流の長男に産まれた。

今は聖フランチェスカ学園に通っている高校3年生。

俺は普通の人間になりたかったが長男に産まれた事もあって物心ついた時には木刀を握っていた。

まあそのおかげで中学校に入った時には北郷流の中でもN O . 2 と呼ばれるまでになっていた。

そして、今日。

俺が北郷流を継げるかどうかを計る試験：N O . 1 の親父との一対一の試合が行われた。

その試合に俺が勝ったため俺が当主に認められた。

一刀「さて、行くか」

外は薄暗くなっていた。

其の一 プロローグ（後書き）

ここまで読んで下さった方々ありがとうございます。

先に書かせて頂きますが一刀君は最強です!!

やっぱり主人公は強いのがいいかな〜と思ひまして。

とりあえず今回はこの辺で失礼します♪

See You Again!

プロローグ 其の2 〱受け継がれるもの〱（前書き）

太陽が沈み星たちが輝きだしたとき 新たな当主が誕生した。

繋がる物語第2話！ お楽しみください

プロローグ 其の2 〱受け継がれるもの〱

――北郷家 当主の間――

親父「ふう・・・負けちまったか・・・。親父が俺に負けた時こんな風だったのかな・・・。子供の成長ってのは早いもんだな親父。ほんの少し前までは剣に振り回されてたのに今では、俺すらも負かす程の腕前だ。本当に・・・嬉しい限りだ」

かつて、最凶とまで言われていた男は優しい笑みをこぼす。

親父「今の腕前なら何処に行っても安心だ。あの試練にも打ち勝てるだろうよ。」

ガタッ

一刀「親父、来たぜ。」

親父「!!!!」

一刀「どうかしたのか？」

親父「いや何も無い。」

一刀「そっか。それで話したのは？」

親父「(まったく気配がなかった・・・本当に強くなりやがって)」

一刀「なんだよニヤニヤして。気持ち悪。」

親父「何もねえよ。それより気持ち悪いってのは無いだろうが！
まあ良い。今回は大目に見てやろう。」

一刀「ありがとよ。それで？ 話って？」

親父「ああ、試験に受かったお前に渡すものがあってな。」

親父「ほら。これだ。」

そう言って、親父は棚から三本の刀と鏡のようなものを取り出してきた。

親父「左から 狼牙ろうが、爪牙そが、龍牙りゅうが。代々北郷家の当主に受け継がれてきた由緒正しい代物だ。」

一刀「見ただけで分る。最高の刀だ・・・。」

親父「今から伝授を行う。北郷一刀、お前を北郷流当主とし、この三本の刀を授ける。この刀は時にお前を守り、時にお前の刃となりて敵を切り裂き、お前を助けるであろう。しかし、お前がこの刀を使うことで必ず誰かが犠牲になることを忘れるな！ 今の自分に満足することなく、日々精進を怠るな！」

一刀「はい。」

親父「ではここに当主の証を伝授する。受け取れ北郷一刀。」

太陽は沈み星達が輝きだした頃・・・
北郷流六十三代目当主が誕生した

プロローグ 其の2 〽受け継がれるもの〽 (後書き)

どうだったでしょうか？

楽しんでくれたなら嬉しいです♪

次回予告？？

満天の星空の下 流星が舞い降りる

繋がる物語第3話 「舞い降りる光」

See You Again!

其の三 舞い降りる光 (前書き)

繋がる物語続きます。

満天の星空の下 光は舞い降りた・・・

お楽しみください♪

其の三 舞い降りる光

―北郷家 当主の間―

スラッ

親父から受け取った刀 狼牙ろうがを抜いてみる

1mぐらいの長さの日本刀で曇りの無いきれいな刃がついている。

あまりにも綺麗で見とれていると親父が

親父「綺麗だろう？ 今だ誰も斬っていないように見えるがもう20万ぐらいは斬っているらしいぞ それに作られてから一度も研がれていないらしい」

一刀「嘘だろ!？」

普通どんな業物でも5人以上斬れば刃こぼれしたりするのだが、それをしないなんて・・・

一刀「なんて代物なんだよ・・・」

親父「まあ本当かどうかはお前が確かめればいいさ」

一刀「?? どうやって確かめるんだよ？」

親父「!! っとそうだな。確かに確かめる方法が無いか。」

親父（危ない危ないばれたら試練にならないな）

一刀「だろう。 まあそれが嘘でも確かに業物だな」

親父「そりゃ由緒正しい北郷流当主に受け継がれてきた刀だからな。」

俺は笑みを返事にした。

一刀「さて・・・もう戻ってもいいか？」

親父「ああ。 それにもう夕飯の時間だしな。 遅くなるとまた怒られる」

一刀「親父も母さんには顔が上がらないな」

親父「うるさい。 ほら、行くぞ」

一刀「おう！」

・・・・・・（しっかりやれよ息子よ・・・・・・）

――夕食後――

親父「一刀！ ちょっと来い！」

一刀「わかった。 何？」

親父「あともう一つ渡すものがあつた。 もう一度部屋に来てくれ」

一刀「ん。」

いつもの親父と何かが違うような気がしたが気にせず付いていくことにした。

———当主の間———

ポイツ

一刀「うわっ、っと・っとと。」

部屋に入った瞬間いきなり鞆が飛んできた

一刀「危ないだろ！」

親父「それぐらいでけがしないだろう？」

一刀「まあそうだけど・・・どうかしたのか？」

親父「いや何も無い。・・・これが最後の渡すものだ。」

そう言って親父はさっき取り出してきていた鏡のような物を差し出してきた。

一刀「鏡？」

親父「いや、普通の鏡じゃない。銅鏡だ。」

一刀「銅鏡？ 社会の教科書に出てくるあれか？」

親父「ああ。北郷流当主に受け継がれている最後の証・・・
触れてみる」

黙って言うことをきけ！　と言われているような気がしたから、素直に従った。

一刀「触ったけど。どうしたn——！！」

俺が触れた途端銅鏡が光を発した。

親父「これが最後の証——そして試験に合格し、三本の刀を手にした者に下される最後の試練。必要な物や役に立つものをその鞆に入れて置いた。後は自分の力を信じて進め。がn——」

最後の方の言葉を俺は聞くことができなかった。

俺を包んだ光が一層強くなり俺の意識はとぎれたから。

親父「行ったか・・・。まあお前ならどこでもしっかりやれるだろう？　頑張れよ。俺の息子よ」

辺りは一面が炎で燃えている。

ある者は生きる為。またある者は刺激を得る為。賊は村を襲う。

それは仕方が無いこと・・・

強者は生きる為に弱者を殺し、弱者は強者の糧となる。

キャー・・・ギャー・・・

村人は逃げ惑う。

賊「おらぁー死ねや!!!!!!」

こうして人々は生き残る。

弱肉強食の世界。

そんな世界に光は舞い降りる。

満天の星空の下 光は舞い降りた。

光は何を見、何をするのだろうか。

全ては光の思い次第・・・

其の三〽舞い降りる光〽（後書き）

どうでしたでしょうか？

いつもより少し長くなりました!!

一応これでプロローグが終わりましたへーへ

では次回予告!!

光は舞い降りた。

光は賊たちの心を変えていく・・・

その圧倒的な力で。

その優しさで。

繋がる物語其の四〽光を纏うもの〽

See You Again!!

其の四く光を纏う者く（前書き）

繋がる物語続きです！！

（真恋姫無双の二次作です）

やっと三国に来るところまでかけました。

まだ本篇のキャラクターは出ていませんが
もう少しで出す予定ですへーへ

では、お楽しみください♪

其の四く光を纏う者く

辺りはまだ焦げ臭い。

燃えた家屋、崩れた家、死んでいる人。

そんな地獄のような風景が目の前に広がっている。

ほんの少し前までは賑わっていたはずの村だったが、私たちに……いや、頭に狙われたが最後、こうなってしまった。

私の村も頭……いやあいつはもう居ないが……に狙われ——壊滅した。

朝廷は何も助けてはくれなかった。

民全ての大空であるべきはずの朝廷は、あいつを恐れて私たちを見捨てた。

あいつ……いや、あいつを頭とした五胡を恐れて——

頭「おい紅葉！　どうかしたか？」

私は名前を呼ばれて振りかえった。

紅葉「兄貴か。　いや昔の事を思い出して……さ」

もうあいつは生きていない。

あいつは雑用として拾ってきた私たち兄弟に殺されたから。

兄貴「過去を振り返っても仕方ないさ――。それより金目の物は回収したから早く砦に戻るぞ」

過去を振り返るな・・・か。確かにその通り。でもあの過去はなかなか振りきることはできないよ・・・兄貴。

私は兄貴の背中を見ながらそう思った。

そして砦に戻ろうと兄貴の後に着いていこうとした時だった。

紅葉「なんだ？あれ？」

少し開けた所に光るものが落ちていた。

兄貴「どうした？」

兄貴も私の声を聞いて何事かと近寄ってきた。

紅葉「人だ！人が倒れている！！」

兄貴「生き残りか？？」

紅葉「いや違うと思う。・・・勘だけど、こいつ拾って帰ったほうがいいと思う。」

兄貴「お前の勘はよく当たるからな・・・。まあ五胡の者として人

を助けるってのは性に合わないが・・・まあ最悪奴隷にして売り払えばいいか・・・おい！夜叉！手伝ってくれ！」

夜叉「どうした？ 椿」

夜叉か。私たちが拾われた後、少しして他の村から拾われてきた同類。あいつを殺すとき共に戦った戦友だ。

椿「拾い物だ。皆まで運ぶのを手伝ってくれ！」

夜叉「?? 村人か？」

椿「いや、紅葉の勘だが、違うらしい。連れて帰ると良いことがあるかもしれないからさ」

夜叉「紅葉の勘は当たるからなあ。でも良いのか？ただでさえ、前の頭を殺して頭になって信用がないのに、その上人助けまがいの事までしちまったら裏切られるぞ？」

椿「まあその時は斬るさ・・・で、手伝ってくれるのか？」

夜叉「そうか。ああ手伝うよ。俺は何時までもお前の見かただよ。」

椿「助かる。」

私は二人の話を聞いている途中嫌な予感がしたが、黙っている事にした。

もしその事を話してしまったらこの男を置いて行ってしまいそうだ

ったから。

不思議とこの男を連れて帰れと、死んだ両親が私にささやいている気がしたから。

———五胡の砦———

俺は目を覚ました。

一刀「ここは・・・何処だ？」

光は舞い降りた。

光は賊たちの心を変えていく・・・

圧倒的な力で。

その優しさで。

一刀「こういう時は現実逃避だよな！　とりあえず、おやすみなさい！！！」

もう少し先の事になりそうだったが・・・

其の四く光を纏う者く（後書き）

後書き

どうだったでしょうか？

連続投稿です！

だんだん長くなってる気がする・・・

とりあえず次回予告！

仲間の裏切り。

大きな暗闇が恵まれない兄弟を飲み込んでいく。

だが、光は暗闇を明るく照らす。

その培ってきた力で――

三本の牙を持ち・・・

その手を赤く染める――

繋がる物語其の五く暗闇を照らす光く

S
e
e

Y
o
u

A
g
a
i
n
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7719o/>

繋がる物語

2010年11月23日04時59分発行